大本山大德禪寺藏版

應燈祖師假名法語

製本所　河合文港堂

將此保存
奉塵秀

特36
67

昭和十九年四月二十二日 内務省蔵書

此深山奉塵埃

明治十九年四月

序　明治十九年四月吾家祖師

五百年拈遠年忘相尚古道武義

を生ずる能導人夏秋二祖の傳名

法語を加筆堆中を利操壹し

拈弄て手小告て云之を梓小授先

門ゝゝ雖傳小味高ゝゝ形化如

予云美矣了若し則蒙を発して
後世示及ぼす者其実数易尽く
人や何敢不信中郎猶還同
再合其勢
見方便收宗旨書

緒言

一這の法語原本二版あり一は平假名の本一は片假名の本なり而とも編者の名を錄せず只篇末に正保三年二月中野道也刊と書舗の名を記せるのみ且つ夫れ原版磨滅してより世間の舊書舗を尋るに一本を得る能はざる惜哉國師の金言永く海藏に沉て顯はざること余嘗て濃國に在て某山の藏書を閲せる因に這の本を見るを得たるを自ら喜ふ宿緣淺からず這の法語を獲るとは今や開山國師五百五十年遠諱に際し吾龍寶老

師に一覽を博し且つ再刻して世間に流通せんことを請て初て斯學に着手せることを得たり

一原本點字上下句讀錯雜して甚だ讀方に難澁せるものあり故に今回改て句讀を正し反點を用ひず且つ冗長の複字を省き專ら讀者をして一目流行して其意を了會せんことを要せるのみ敢て古人の文を取て強て臆測を爲せるあらざるなり

明治十九年三月

宗能識

横嶽大應國師法語

夫生死を離れ菩提を修せんと思へば。先づ此心を體とを明むべし。體と云へ。汝か四大。地水火風是なり。此四大々本来不生不滅にして。惣ぶて生死なし。不來不去常住不變の法界より現ぜたる四大なれば。無主無我にして。來る時も法界より現ず。去る時も亦法界に歸す。故に心性は虚空と同體にして。朕跡なく涯岸なし。萬像も增せもなく。五蘊も亂るもなし圓陀々孤迥々圓滿無際なり。只此の正體を。十方虚空遍法界に彌綸して。一

塵一法も他物ならむや。草木國土山河大地塵々法々。森羅萬像。悉く是れ本地の風光本来の面目なり。此性體も。現定の見聞覺知の中に在て。嘗て見聞覺知と同じからず、諸佛出世もそとも。此性體へ出世せず。衆生輪廻もそとも。此性體へ輪廻せず。威音那畔空劫已前より。天真孤り朗かにして。虛空を以て體とし。虛空を以て性とも。諸佛の真源。衆生の本性なり。草木國土有とあらゆる物。皆此を性とも。故に萬法と心法とも一如なり。是即心即佛なり。」問ふ萬法へ無念無心にして。是非

分別無し。我等も物ぞとして是非分別あり。何んとしてか法と一如なる可きや。答云。我等か見聞覺知の精靈も。悉く虛空を以て體とする。常住不變の妙心より出たる妙用なり。此妙用の鏡清けさへ萬像森羅の影。妙用の鏡にうかぶ。衆生々此一念本來の妙用なるをを知らずして。此一念を愛し憎まべ。癡狗の塊を逐が如し。汝看よ。世間の中に有りとあらゆる處の物々。皆去を是と非とな り此二を離をも。是も是にして無心無念なり。非も非にして無心無念なり。故に是非得失生死轉

變。一切の諸法も。皆是汝が本地の風光本來の面目なり。」問云狀の如く心と性と一如なりと見るとも。動もすれい物まよりて。或時い愛し。或時々瞋り。或時い朦々。或時い惺々。或時々散亂も。衆生皆狀病あり。何とし てか是非一如と觀も可き。答曰汝が一の念る精も。汝か四大の中の火大は當る時。面も赤み身の中もほゝめく。狀も是れ火大の精なれい。何物をか我と云ふ可き。朦々たる時い。汝か四大の地大は當る時。朦々として物を知らざるあり。物を愛し慕ふ心深ふして。泣けも涙

の浮ふことも。汝が四大の中の水大は當る精なり。何物をか我と云べきや。手をあげ足をおろし。東西南北は往来し。動きまたらき。音を出す。此を汝か四大の中の風大乃わざなり。何物をか我と云べき。又汝か一大事の命と云も息(イキ)なり。息い風大はして。虛空はみちふさがりたる風なり。狀四大も。本來法界の正體なり。何物をも我と云ふ可き。衆生の我と思へる物い。貪瞋癡なり。狀を以て我とせり。如來の我と云い。常樂我淨の當體。草木國土有りとあらゆる處の物を我と云。螻蟻蚊虻

蠢動含靈に到るまで。悉く是我ありと識得せ
ん。慾て隔てるなし。亦我として取定て愛せ可き物
も無し。朦々たるも法界の朦々。惺々たるも法界
の惺々たり。狀朦々惺々共に更に汝か朦々惺々
に非ず。常住不變の妙心の妙用なり。唯汝がひざ
ろの貪瞋癡を認て我ありと思へる其我を急に
打失して看よ。其無明の我を殺得せる時。誰かつ
て亦生死に迷ふ可けんや。本來生死無しと識得
せよ。誰かつてか修行を用ゆ可き。一法の得可き
無く。一法の捨へき無し。一塵一法も胸中に物無
し。圓融無際大法現前の處。狀。即大安樂の處なり」。
問て云。一法不修の時を安然として便り無し。狀
の如くなる時を。無為無事の見に落んや否や。答
云。しざなき處を好と思へば。無為無事の見に
墮せ可し。本來無我と悟る時は。又何物かつてか
無為無事を好取るへきや。真に汝か其碍障せる
無明の我を急に打殺して看よ。山虛風落石樓靜
月侵門」。問如何なる是佛祖不傳の處。答曰來て問
へ。早く天地遥に隔つ。有心にして求め。有念に
して行せよ。棒を擧て月を打ち。履を隔て痒を

搔くに殊ならず。狀汝が傳心の處に異ならず。直に前念後念に渉らず。驀然として箭の絃を離て返田の勢をきゞ如くならば。啞子の夢を見て他に向て語り得されども。心中明々たる處なるが如し。是即佛祖不傳の處なり」。問云既に一物も授くる處なしと云が如きんハ。佛より二十八代の祖師何として か相傳と云ふ。答曰相傳と云ふ。一法を相傳せるに非ず。佛見法見有相無相共に截斷し盡して。胸中に一物も存せる處なくして。孤明歴々赤洒々として。三世十方を通貫せれとも。鳥

道の虚玄なるに似て。羚羊の角を掛たる異ならず。是即大安樂の處なり。唯狀安心安樂の處を傳て。更に一法として人に授る所なし。されば道無心にして人に合ひ。人無心にして道に合ふと云り。世間の中に有りとあらゆる處の物々。皆是道なり。道と心と二ふあらず。心即是道。道即是心なり。心と道と一如なれハ。誰かつてか道を行べき。行ぎれハ二法となる。刀不斬刀。眼不見眼。喩の如し。父母所生の口を開て。心と説き。性と説き。禪と説き。道と説く。皆是れ是非海に墮せ。佛に逢て

ハ佛を殺し。祖ヨ逢てハ祖を殺し。六親眷屬ヨ逢てハ六親眷屬を殺し。一塵一法も立てぎる。此を大道ヨ至る修行の體なり。若し心中ヨ去ハぞと思ひ定る處なきハ。六十二見を出でぎ。古人云真證の處ヨ至らんと思ハ。直ヨ目前を識得せよ。目前ハ是何物ぞ。目前ハ是法。法を是心なり。心法惣て一如ならハ。何そ法を尋ねん。尋ぬハ機法殊なり。心法共ヨ忘もそを。即大用現前して軌則を存せぎる處なり。

問ふ如何なるか是大用現前の處。答曰。銀山鐵壁。

問云。悟る時も銀山鐵壁。悟らざる時も銀山鐵壁と云ふ。同異如何。答云。銀山と云ハ。此性體。清浄光明ヨして。終日般若の智を行じ。通霄圓覺の靈光を放て。天真獨朗なる。本源清浄の心體を。銀山と云なり。鐵壁と云を。此性體。十方虛空遍法界ヨ遍塞して。進めハ前ヨなり。退けハ後ヨさハへ。口を開んとをもハ頤をさハへて。言語を出ハして明らめざる處。此を鐵壁と云なり。此性體を。諸佛出世をもそも。覺ヨも同せをも。衆生輪廻をもとも。迷ヨも同せを。湛然寂靜として。迷悟ヨも同せす。故

に悟る時も銀山鐵壁。悟らざる時も銀山鐵壁と云なり。凡そ一千七百則の公案は。皆一心の異名なり。或時々體を指し。或時々用を指し。相を指す。或時々體用相を一句に現はす時あり。此の如く語は無量なりと雖とも。指す處は。本地の風光本來の面目を顯はさむ。人皆其句を守て。其理を知らむ。此の如き人は。不立名字の宗旨を滅却して。稱名念佛の人に同し。又株を守て兎を待つに異あらす。一千七百則の公案は。盡虛空に逼塞して。間に髮を容さむ。万里一條の鐵ありと識得して。

迷や悟や。得や失や。本來一物として。取るへきともなく。又捨つへきともなると識得せさは。一法の情に當るなとなし。此の何をか提撕せん。江月照松風吹。永夜清霄何所為。

又說云。初心晩學の人。若し自已を明らめ生死を明らめんと要せは。第一に道に向ふこと莫さむ。況や迷を厭はんや。目前に色に着せむ。心内に理を認めむ。内外洞然として。手足を離て看る處なるさむ。此に到て若し實に工夫を失せは。已さか工夫をかるて。當下に所知思ひ。空所に透脫し去らは。

廓落として脱體圓成あらん。萬緣萬境自無く他無く目無して見耳無して聞くが如し。此の如くなるを且く名て大安樂大自在無碍の道場と云ふ。莫疑々々記取せよ珍重

又云。法々本來法心々無別心。世界國土未だ顯れも。佛界衆生界未だ別もざる以前。此心獨り顯も。天は前だち地は前だち。古は光り今は輝く。是故は古人云。有物先天地。無形本寂寥。能爲萬像主。不逐四時凋。只要も學道人。天然の志を起し。生佛未分。一念未起以前。精彩を舟て。見來り見去り。窮め來り窮め去て。靜は見よ。修行積り工夫至らい。明々として自已本來の心地と本地の風光とを見つ可し。若し能く此の如く。實は此心を知る者い。生死を出で佛界を越て。獨樂安閑休歇無心の道人なり。光陰速は遷り。時節留まらす。勉旃々々。夫も生死を出る道い。佛祖の示も所なりと雖とも。其源を尋るは心を明むるは過たるいなし。然るを人皆心即是佛なることを知らす。外は佛を覓め。徒は疲勞して終は實理は稱ふこと無し。譬い南は行々る親を知らず。其子北を尋て行くが故

ま。行まに隨て彌親まに遠るか如し。又心が即佛なるのみまにあらす。十界十如三千世界山河大地草木國土淨土穢土依正の二法依ハ國土正ハ衆生等悉皆心の内まに具足せり。心を本より自性無きが故まに。所爲の業まに隨ひ向ふ境界まに付て。移り行くものなり。物を害し物を盗ミ罪を犯し法を謗まハ。心地獄と成り。慳貪邪見なまをば。心餓鬼となる。愚癡闇鈍なまをば。心畜生と成り。偏執我慢なまをハ。心修羅と成る。五戒十善を持てハ。心人天と成り。他を化度せまを我が自度を求めハ。心聲聞緣覺と成る。智慧

慈悲深けまをハ。心菩薩と成り。諸事を悟まをハ。心佛と成る。物を妬む女の直まに蛇身を得れるてと其數多し。此の如く一心てそ。諸事ふ變ま。佛法ハ更まに外まにハ無き者なり。喩へハ一の金を以て十界の形を作るまに。形ハ異なりとも金の性ハ是一なるが如し。諸法萬差ふまとも一心を離まを。華嚴經云。三界唯一心。心外無別法。心佛及衆生。是三無差別。又云。心を巧なる繪師の如し種々の五陰を作る。一切世間の中まに心より生ぜぎるハ無し。又同經云。此心をハ淨法界之心と名くと。淨法界

の心とい。晴れる空の如し。虛空の晴れる時へ。唯青くのみ見て惣て餘の物無きよ。何處よりか來りつらん。一點の雲來ると見る程よ。其雲次第よひろがりて。一天よ覆ぬもへ。風を起し雨を降せ。其時ゝ虛空の姿ゝ皆失て。只黑き雲のみを見る。此雲を無明と名く。諸の煩惱の根源を無明と申せふり。心も亦此の如し。何事も思へぜしてゐる時ゝ。晴空の如し。見聞覺知の境界よ逢て。一念偏意例はれず處なり起る時。妄念の雲厚く覆て本心惣て陰沒せ。さもとも妄念へ生ぜる物にくありけを

へ終よゝ滅せる後へ本の心よてあるなり。雲晴もぬもゝ清き虛空よてゐるが如し。又此心を一の鏡よ喻ふ。心よ浮お念を鏡よ移る影よ喻ふ。此の心の鏡よ善を作せ時ゝ善の影移り。惡を作せ時へ惡の影移る。一切の思ふ處の業成せ處の事。心の影と成て。此影よ牽ゆて六道四生よ沉淪せるなり。思ふ影よ牽るゝと云ゝ。一切の事を心よ約束して。其約束を深く執して離さぬ程よ。最後臨終よ地獄餓鬼等の諸の境界を見出して。彼よ隨て種々の生所よ趣くなり。本ゝり心の外よへ。

善所もなき者ぞと知るべし。何ぞ善悪の生を引くへき。譬へ世間の寒ぎる時。柔かなる水も堅き氷と成るが如し。氷い水の外の物にあらす。有も有と名無ざるを。已を執して有とし。空も空と云いざるを。已を執して空とす。譬へ人あつく一の赤子を設て。始へ鶴と名け次に名を換て亀と名く。亀と名けて後へ。前の鶴の名へ忘て只亀とのみ認めり。又松竹等の名に替るも。替るごとに前の名を忘して。只今の名のみ執せるが如し。其名を取り除て見るべ。只本の赤子にくらりりる。此の如く已れが物に名を附て置て。其名を執して無き事を有ると思て其思に引れて流轉するるり。安國師云。若し善に住して心を生ぜるべ。善現じ。悪に住して心を生ぜれへ悪現して。本心即ち隠没しぬ。善悪に住せざる時。十方世界只是一心なり。抑も諸の物を納めたる其心。何に在るぞ尋ぬるに。惣て行き方なき者なり。内にも非ず外にも非ず。若し内にあらへ五臓六腑をも見るへし。若し外にあらへ唐土天竺。心に浮ぶ所。皆見るべし。固ふ色を見ず。形を知らぎるへ本心へ無き

者なり。本心既に無き上に。影に〻く有る念に。るべからず。而ながら無んに。何をにか思の影移り業ざの影留らん。此の如く。無き事に迷て。善悪の果報を受る。故に。佛の諸法に夢に似たり。又幻の如くと說きたふ。夢みるときに善も悪も有りくと思へども。覺めて見れれに何もなし。夢幻々結ぶ初めもなく。覺める終りもなし。善悪の諸法々善悪の境界に引れて生をそとも。其源を見ずに始も無く終も無し。夢の覺て後なきが如し。さもとも夢も實に無々れとも。悪き夢を見る時

ハ。苦痛堪へ難し。吉夢を見る時ハ。喜ひ樂む。凡夫々此念の内にして。生死の深き夢を見る。朝夕の境界の縁に向て。悪念をのみ起す故に悪夢のみを見て。三悪四趣に墮すと思へり。佛ハ善悪の起る源を知て。執心なき故に鎮へに念を起せざる。無念とする。無念の處を暫く心と云ふ。心と云ハ。名のみ有て實形なし。古人ハ無心と云へり。箇様に心得なに。念より結ぶ生死を有るべからす。此の如く見て。知りにつるを。一分の見性得果と云なり。其上に〻厭ふべき生死も無く。欣ふ可き

極樂も無し。迷悟の隔ても無く。凡聖の差別も無し。此處を生死を離るゝと云ひ。淨土に往生せと云ひ。佛に作るとも云なり。故に觀無量壽經に。是心作佛。是心是佛。諸佛正遍知海。從心想生と云ひ。往生禮讃の晨朝の讃に。西方遠しと謂こと莫れと云ひ。西方已が心に安ぜるとも云り。又黑谷の金剛法界章に。阿彌陀といへ心の異名なりと云。法華の妙の字を釋せるに。妙といへ心なり。是の樣に心得ふべ。唱へぎりとも。鎮へに念佛し。行ぜざれとも自ら極樂の衆生なり。是へ教家の意なり。若し夫れ教外別傳と云へ鏡も影も打破して惣て六識の思量を絶し。迷悟の差別を為さず。念へ有らべ何れ。無くべなけれ。其れまも倚らせ。是非を存せず是非を離れず。唯知識の下を處の一句を得て。慥に透らんと工夫せるなり。其一句とへ。知識授て曰父母未生以前の本來の面目。一句に答へ來れと。是を答ふるに心意識を以て案ぜべからす。又之れを離て案ぜず。道理を以ても答へず。道理を離ても答へず。只問へべ答るべかりなり鐘を打つに鐘木に隨て響か如く。名を

與ぶして。名は隨て響るか如し。利根の者い與るい即ち答ふ。鈍根の者として半年一年十年二十年まも退轉なく辛苦をもとる。終は透らをを云こと なし。古人云。敵は向て只今勝負を決せんとをる如はせよ。毒矢の胸に立たるが如はせよ。胸中は一團の火を燒くが如くはせよ。父母を一度は喪をるが如はせよ。百万貫の錢を負て償ふべき方便なくして耻辱を與へらるゝが如くはせよ。此の如くせば。必を一分の相應をることなるべし。惣て公案一千七百なりと雖とも。山河大地草木

樹林。目は觸を耳は聽くもの。皆公案ならぬと云ことなし。此宗は於て三重の義なり謂ゆる理致機関向上。是なり。初の理致と云い。諸佛の所說並は祖師の所示の心性等の理語なり。次は機關を云々。諸佛祖師の真は慈悲を毎て謂ゆる鼻を扭り目を瞬ろかして乃ち云泥牛飛空石馬入水等。是なり。後の向上と云々。佛祖の直說。諸法の實相。惣て異なることなるし。謂ゆる天い是を天地い是を地。山は是を山。水い是を水。眼い横。鼻い直等是なり。然をとる此三句透得をることを是を難し。或

い理を留つて知見解會を生して言句所説の文理を會し或を機関を隨て恍然として疑を絶せも偏を機用を留り或い向上を住して法々自然の見をなして無事甲中を隳せ然もぞも時節因縁到來して三句通る者是を多し縱ひ不得心の者も寢ても寐ても立ても坐ても精彩を目を着て心をゆるさず行を可し狀の如くせば終を得ぞと云ことなし佛法の心得い他事を思ふ可からず只志の無きあとを歎く可し大賢云始て入るい常を難し難きを以て退かい何その時か得へき縱令ひ得ぞとも狀の如く歎て死ぬい臨終をい獄卒の杖を打れる可からも念々般若の功力何そ空しかるべき次乃生ぬい必も大事を成もべし大恵禪師云縱ひ打して通らざるとも般若の中をなると云唯是の身を思いんと思いば狀身を思いも木石の如くなるべし木人い人の打つをも痛まも罵るをも腹立も譖もれとも瞋らず讃もとも喜いも生をも欣いも滅をも歎かぞ狀い親く彼い疎しとも思いも用をい用らも捨もい捨らも風吹い動き雨降もい濕ふ修

行も此体はなりぬるい。厭ふ可き生死を無く。欣ふ可き菩提を〻。其上ゆい修を可き處もなく。行をへき道もなし。只是を行住坐臥。任運自然なるものなり。きをゞとて。一向は木石の如くふ無心者は成をと云まいあらず。唯諸事は於て執心なきを云なり。風吹けい波立つ波を離て水無し。境界は遇て衆生皆此の惑性なり。此を救ん爲めに古帝掛と未掛と。小魚呑大魚と云も倒なり。皆是を惑性なり。此の如く擧揚し。此の如くは體裁なり。是又奇特の事はなりす。只是尋常の理なり。此

境界は遇て瞋恚起る。是より外は心無し。透得して立歸て見をい。萬法い迷の法はなりす。又悟の法はなりす。本來歴然として不增不減なり。是を古人は如何ぞるか是佛法を問て。庭前柏樹子と云ひ。柳は綠花い紅とも答たり。きをゞとて又這ことを佛法よとを取定むへからも。故は悟りし古人い。把定きをい雲谷口は横り。放行きをい月寒潭は落と云へり。此体の事を我と疑ひ無き程は明むるを道者とも佛者とも申をなり。愚哉縱令ひ人千年を持つとも。終はい其期なるべし

況や老少不定の世の中の。今日とも明日とも知ぬ身。何時を期し何ゝ憑て。徒らゐ明かし暮をら ん。世間有為の法。何とあくとも過をべきゝ。昨日ハ今日の為めゝ捨り。今日ハ明日の為ゝ貯ふ。或ハ此ハ悲し彼ハ悪くしたんと思ふ程ゝ。悪業々愈積り善縁ハ愈遠かる。此體ゝして長き暗ゝ入りなが。後悔をとも何の益かあらん。徒らゝ野外ゝ捨る身を同くバ佛法の為めゝ捨つ可し。努々莫怠珍重

上ゝ細々書て候へとも。只所詮ハ公案を一つ以て。何と答へんぞと案ず候へハ。答へんぜる様を案ず得へく候。尤様の事候ハぬ時ハ。知識ゝ参して其様を述申をへし。知識ゝ参して。幾度も案して見解のあらん度毎ゝ述べ候なり。一句を透得る時ハ千句萬句も皆透り候。其後ハ生死自在ゝして。極樂ゝ生をんとも。都率ゝ往かんとも。又人間ゝ來て衆生を利益せんとも。其意樂ゝよるべし。但一句を透得ても。是をを判ずて出さんぜる知識そ有り難く候。此比る諸方を兼るゝ。其の示を處様々ゝして。或ゝ一切を忘をて。一物も無き處

へ向へと云ひ。或い如何ともせぬ處へ向へと云ひ。或い憎愛無き處へ向へと云ひ。或い案ぜるい是病ひ。諸事煩ひ無き處よそ好きと云ひ。或い諸法い自然の法よて因も無く果も無しなど申も由。是等も皆然る可き人々の申も事よて候へる。定て一義のらんと覺へ候へども。真よ透得候へい。何ぞ是體よ亂き候べき。本より法よ二法無し。世間よ是よそ正知識と申さん人よ常よ參して聞し召さるべし。正知識とい長老坊主よちらず。道世籠居の人の中よるのるべし。羅山禪師白雲

守端などと申も人い。皆隱居の人よて候。是體の事を能く思食し分て御修行候へし

又云本來是の如し。更に迷はと無く悟はと無し。謂れ無く我も迷ひたりを思て。外よ佛を求る樣に思う心迷なり。外に別の法なし。心と佛と衆生と三つの差別なし。祖師云即心即佛と。又心の外に佛無し。心を離て佛を求むれも。地を掘て天を求るか如しと云り。佛祖の言も。爭ての疑うなき。偏に箇樣に信ずべし。明暗起ても居ても。加樣に振舞う物も。何に物ぞと。能く見れも。見る物も無

く。見らるゝ物も忘れて、力ら竭き神疲るは
てたる處を。少し力を得たりと申あり。此に至て
覺へざるよ。我本姿の不生不死。埋れども埋れず。
燒けども燒けず。喜も憂もあらざる處を知るな
り。是古佛真の佛法身の如來と申して候。此に至
て地獄も無く極樂も無く取る事も無く捨る事
も無く。衆生も無し。取る事も無き故に僧も僧の
行をなし。俗も俗の業をなすなし。然れとも。作す
處に更に執着せず。捨る事も無き故に。本の如く
皆作す可し。喜愁も人と同じ樣に有れども。内心

も次第に面白く涼しきなり。本心の何にも着ざ
る處を知る故なり。此時も前に申つる。迷う事も
悟る事も無かるなし。祖師云善惡も思もず。此處
に打向うへ。若し又萬の念起らも。是何物ぞと
看よ。本姿見ゆへし。又尋常の人の思たる樣も。佛
しも光もさし。神通も有るべし。何事も一切知る
べく本の如く寒熱人に變らずと思う。佛に三身
あり一に法身。二に報身。三に應身なり。神通變化
ある佛も。三番目の應身なり。是も悟を開て後に
人を利益する時暫くの方便なり。是程の事も。魔

外も天狗も真似することなり。二に報身佛も智ある姿なり。第一の法身と申候こそ。實の佛の御心にて候。是を先に申つる樣に佛に在ても衆生に在ても更に變らず。目にも見へず。耳にも聞へず。心にも及ざる處なり。法華經云是法は。思量分別の能く知る處にあらず。金剛經云。若色を以て我を見。音聲を以て我を求めは。是人邪道を行ず。如來を見こと能わずと。是も肝要の語なり。諸佛の御心に少も違うへからず

示病中者

病中の工夫は。唯心は物を懸けざる。今世の祈禱又未來の菩提なり。是をは過たるおと有るへからず。縱ひ必死おそとも。必ずたもかることとなるつ。又死去をそも更は六道四生は浮沉せを。只管は打拂て一切の事を打捨て。無心の時取付く處なき。自已の根本。悟りを得るは近し。又取付く處無きとて。佛を念し別の工夫有るへからず。左樣の雜事なそは。這の大法は入る甲斐なくして。生死海は輪廻して六道を離をを。古人云。作事心は何をは禍身はありと云へり。大善知識は逢て。

かゝる事を聞分るを以て。過去無量劫より大願堅固なる人と知るなり。故云道無心合人人無心合道と云へり。一心より此語を信して二心なるへからず。法華經云諸法寂滅相不可以言宜と云へり。行住坐臥無相無念なるへ。一切の悪業清淨の光明と成り。三世十方寂滅為樂にして。煩惱即菩提生死即涅槃と云ふ意を得て。病惱に任て。取捨く處も無き時。真實に如是信向せへ。佛祖の本意に通して。二世の所願成就を。莫疑々々。謹て以て信向あるべし

紫野大燈國師法語

御行道之事。坐禪思食様に成らざる由兼り候。是も坐に依て道を得べしと思食候て。御心に悟を待せ給ひ候あり。是も無極の御僻事にて候。道も行住坐臥の相を離るゝ故に坐に依て得べからず候。道も去來動靜の相を絶するが故に。悟を待ても得へからず。又生死御到來の時。一念不生の處に打向へ被る可きの由兼候。又或も寒を覺へ熱を覺ゆる處。一念なりと思食候て。一切不覺不知の處に打向ひんと思食候。是亦一つの錯りな

り。又念生すると思食候に依て。不生の處に方向わんと思食候處。二つの大惡念競來候なり。若し然らすんと。生も不可得の生なり。死も亦不可得の死なり。然らと生と生に任せ死と死に任せ。生死に於て。煩らわざる。即是一念不生の處なりと思食候歟。是亦生死の中の人にて候。若し生死を見すんと。何に依て任すすることも候べき。然らすんと。本來生死無く。本來念相無く。一念不生の相もなし。前後際斷して。廓落虛明なりと思食候歟。是亦好樣にも候へども。此の見。又眞實ならず。

這上の三見も。佛法眞實の處にあらず。一念不生の處とも。上の三見を出つ可からず。若上の三見の外に。祖師の云う處は一念不生ならも。亦箇樣にも兼る間數く候。是に於て。能々精彩を着て御勉めあるべく候。世間も無常にして。幻の如く電の如し。今生空く過きも。未來期し難し。釋尊王位を捨て。龍光珍寶を沈む。先規耳に在り。父獨是何人ぞ。細々申兼る可く候間。閑事を申候。是を宗門の中の事に有る可からず候。一見の後。御破却有るへく候。恐惶謹言

又云。自性本より佛なり。更に佛を求むへからず。自性に生死無し。又生死を厭うへからず。狀の如く。佛をも求めず。生死をも厭はざる時。自性本より現れて。百千の日月よりも明なり。是に於て少し心を注て明め取おとなり。是を見性と名く。實に自性を見は。直に生死涅槃を越て。本來の佛にて有るべし。

又云。何事よりも。先達兼る如く候。感悅の外他事無く候。横嶽の法語に下語をして。まゐらせ候。是を御覽あるへく候。本を知るし食され候もぬ程

た。下語をた御心得ある可からず候○法々本來法。下語云足瘦草鞋寬○心々無別心下語云鐵丸無縫鑄○世界國土未顯下語云綠水青山○佛界衆生界未起下語云青天白日○有物先天地下語云黑如漆明如日○無形本寂寥下語云逼塞虛空○能爲萬象主下語云消得龍王多少風○不逐四時凋下語云凜々清風面地寒何れも狀法語の詞を。分明に知るし食され候て。下語をた御心得候。中々下語をば。遥に尚れ御心得にくき樣に。われらせおたしまし候。然るに本を御知り候わん時

た。少も不審あるへからす候。先に申候一念不生の處にハ。無佛無法。無迷無悟。天も掩ひ難く地も載ぎと申候た。一念不生の處を。直に知せまいらせん爲めにおき候を。茲を知ろし食めさと候たで。一念不生の處へ。佛衆生もなのるべきもれを。と。道理に落て。そこにて又一念不生の處へ御尋ね候程に。動もすれば。佛衆生相分をなんものをと。道理に立返りて。知らざる處に直に向く御心た。れろのに候なり。唯所詮知らざる處に向て。御行道有る可く候。知らざる處に向ひ候時ハ。知らざる處と云處も亦無く候。知らさる處に直に向き候もぬ時おき知解にて。知らさる處に向くとも覺へ候へ。只知らさる處を。知り給うへく候。知らさる處を知るた。頓て一念不生の處にて候なり。横嶽の法語よく候へで知せ給うへく候。事々又申入可く候恐惶謹言

又。悦入て候し。其後御見解にのに漑らせ御座ましし候もん。能々兼度おき候へ。御行道あるべき樣をで。始より申入候上へ。横嶽の法語を。參せ置き候しの。其もに過く可のらぎ。猶只一念不生の處

を。行ぜさせ玉うべく候と申候て。一念不生の處に於て。又行して法を得へきにてい候いぬなり。一念既に起らさる時て。佛も無く法も無く。迷も無く悟も無し。譬い虛空に相貌無きの如し。直に一念不生の處を。知りぬれて。即虛空の正體を知り。虛空の正體を知りぬるい心の正體を知り候なり。只尋常い空なりとはれ知りて。心の正體を知らぢ候。處々に全身を失ひ候なり。故に古人云心て虛空界に同し。虛空を悟り得る時。是も非も法も無く。是實に貴く覺へ候。虛空の正體い。本と是非知解情識を以て知るへき物にて候いぬ程に。虛空の正體を知り候へぢ是も非も無く。亦法も無く候なり。只此處を能く知らせ給ひ。着衣喫飯行住坐卧此の中を離れて候なり。相かまへて御行道あるへく候。何事も疎おろそかに知りていかなうまじき事にて候。愚僧の二度御目に掛る事候いい。愚僧を勘破せさせ給ひ候程に在せれわしまをへく候。萬。文にい盡し難く候。省略仕候。恐惶謹言

示萩原法皇之后

凡そ参禪學道の倫。初心の時も。坐禪を專らにせべし。夫坐禪とハ或ハ結跏趺坐。或ハ半跏趺坐にして。眼を半目に開きて。父母未生以前の本來の面目を看よ。父母未生以前と云ハ。父母未だ生せも。天地も未だ分たぬ。我も未だ人の形を受けさる以前を見よ。本來の面目と云もの現るへし。彼本來の面目と云ハ色も形も無き物なり。譬へハ虛空の如し。虛空にも形たきなり。故に佛説に云佛身法身ハ。猶虛空の如しと説き給ふ。佛身と云も。法身と云も。本來の面目の事なり。彼の本來の面目も。元名字なきなり。本來の面目とも。或ハ主人公とも。或ハ佛性とも。或ハ真佛とも。ホなたより名けたり。譬ハ人生れたる時。名ハ無けれども。以後色々の名を付るが如し。一千七百則の公案とて。話頭の數千七百あれども。皆彼本來の面目を。見せしめん為めなり。世尊雪山に六年端坐して。明星を見て悟らせ給ひしも。彼面目に相見し給ふ事となり。其外古人の大悟大徹と云も。彼面目に相見もるを云なり。二祖も雪に立ち臂を斷て悟り。六祖も人の金剛經に應無所住而生其心

と讀を聞て悟り。靈雲ハ桃花を見て悟り。香嚴ハ瓦の竹に當る聲を聞て悟り。臨濟ハ黄檗に六十棒打れて悟り。洞山ハ水を渡るとて。我影を見て悟る。是皆彼主人公に相逢まとなり。彼肉身ハ家なり。家にハ必ス主人有るへし。彼家主をハ。本來の面目と云なり。誰とも我とも云なり。熱き寒き抔と知り。或ハ物に貪着の心あり。或ハ欲心あるハ皆妄念なり。真の家主にてハ無きなり。彼妄念ハ附物なり。一息の息(イキ)きるハ時。同く消もるものなり。彼妄念に曳れて。地獄に墮して。六道に輪廻もるなり。彼念の起る源を。能々坐禪をして見よ。全く念ハ形無く。體も無き物なり。死後も彼の念ハ。殘て有るべきと。思うに依て。地獄に墮て。種々の苦を受て。又娑婆世界に輪廻して。苦を受るなり。時々に起る念を捨つべし。古人云心生もれも。種々の法生ず。心滅もれハ。種々の法滅もと。説き給うも此事なり。心生もるとハ。一念の起る事なり。彼の一念起るに依て種々の悪心起りて色々の罪を作り。悪道ハ墜るなり。心滅もとハ一念ハ本と體無し。死もれハ俱に死もるものと思へハ。地

獄も天地も無き事なり。喻へハ白紙に地獄の繪を書き。罪人を書き。鬼神を書き。極樂浄土を書出ぜゞ如し。本來ハ明白にして。地獄も無く極樂も無きを。一念を以て色々に造り出せなり。只念を拂ひ捨る事を專にせべし。念を拂へと云ハ。坐禪をせべし。念を收れハ。彼本來の面目顯ハるゝなり。念ハ譬ハ雲の如し。雲霽ぬれハ月顯ハるゝなり。真如の月と云も。本來の面目の事なり。又ハ念を鏡の上のくもりに喻るなり。曇を拂へハ。鏡顯るゝなり。念を收て未だ生ぜざる前の面目を見よ。

生れざる以前と死して後とハ一つなり。生れざる以前を知らハ。死して後をも知るへし。生れざる以前ハ。地獄も無く極樂も無し。只本來の面目のみ有て。異物無し。本來の面目と云へバとて。形などの有るべき物にあらせ。能々工夫して見給うべし。肉身死せれども。渠ハ死せず。肉身生せれども。渠ハ生せず。故に不生不滅の物なり。彼本來の面目ハ生死輪廻無し。然に彼面目をハ。生死を截る利劍とも名くるなり。真佛とも云なり。木に刻み繪に画くハ表相なり。真の佛にハあらず。唯

一心則是佛なり。心の外に別に佛ありと思う事
い外道なり。佛を以て佛を禮もる事なこれ。佛い
經をも讀まも。戒律をも持たも。又戒律を犯さも。
善惡をも造らも。真佛に逢ひ奉らんと欲せい。見
性もへし。若し見性せもんい。念佛誦經して戒體
を持つとも閑事(イタヅラゴト)なりと達磨大師說き給うなり。
見性せざる人ゑ。善知識に逢ひ奉りて。生死の根
本を明むべし。見性せぞんい。縱ひ十二部經を讀
得とも。又生死輪廻を免れもして。三界に苦を受
くべし。昔し善星比丘と云人あり。十二部經を讀

得たりと雖も悟らもして。佛の說き置き給う口
真似をのみして。佛の內心を知らざるに依て。地
獄ゑ墜るなり。又梁の武帝僧十人請して。常に說
法させ給う。其中に雲光法師とて。大學匠あり。佛
の四十九年の說法を。我ものにして說き給う人
なり。時に誌公と云人の曰。彼人辯口利舌にして。
說法もと雖とも。悟らざるに依て畜類なりと云。
武帝い此の云處を用ひ給いも。即講法せんともも
るを。見給へも。即牛なり。此の如く悟らざる人の
讀候經い。結緣いかりにて。真實の志にいあらも。

悟し人い。尋常の物語も御法の聲となるべし。見性とい。心佛を悟るを云なり。能々念を収めて。心佛を見よ。箇様に申せい。坐禪にあらをしてい。見性すへのらぎと取定るなり。是い錯なり。永嘉大師云行亦禪坐亦禪。語默動靜體安然と。是い行も坐も物語も。皆禪なりと。説ぎ給うなり。只念を收めて居たる計り坐禪にていあるへのらを。起居に念を注て不審を為をへし。忽然として本來の面目に相見をへし。成佛と云も彼の一心の佛なるを知るを。成佛の人と云なり。彼心佛い善をも

修せを。悪をも造らを。戒律をも持たを。精進をもせを。懈怠をもせを。貪着の心無き者なり。眼に色を見て色に着せを。舌に物を味ひて味に着せを。物々に着せさる心。即是なり。馬祖和尚の即心即佛と示し給うも此理なり。有人。達磨大師に問う。地獄とい何處ぞや。答云唯汝か心中の貪瞋癡の三毒是なり。貪とい貪着の念なり。瞋とい怒る念なり。癡とい愚癡の念なり。只此三毒。善悪の法を造り出をなり。別に地獄として世界の有るへきと思うい迷あり。問云極樂淨土と申い何處の境界

にて候や。答云極樂浄土とて。外に在るへからず。只汝が心中に在り。前の三毒い汚穢不浄とて。清からざる物なり。彼三毒の不浄を打ち拂う處。即浄土なり。種々の汚れたる妄念を。拭ひ捨る處を、浄土とハ申るり。別に浄土を求むへからず。有人。達磨大師に問う。佛一切衆生をして伽藍を修造し。佛像を建立せしめ。焼香禮拜せしめ。六時に行道して佛道をなせと説き給う。是なりや不や。答云佛の所説。無量の方便あり。一切衆生鈍根下劣にして。微妙の法を悟らむ。姑く伽藍を修造し。佛像を建立せしめ。其結縁に依て。真實の伽藍へも至て。真佛をも見奉らん事。疑ひ有るへからずとて。箇様に説き給うなり。真實の伽藍とい。汝が三毒の不浄の念を除き。六根を清め。身心湛然として。内外清浄なるを。真實の伽藍殿堂とハ云なり。伽藍の本尊とい。心佛の明らかにして顯れ給うを真佛と云なり。唯妄念の不浄を拭へい真佛顯を出るなり。是を伽藍を造り。真佛の形を建立する人と云なり。達磨大師此の如く説き玉う故に。伽藍を修造し佛像を建立せい。其功力に依て。必真の

伽藍に至り。真佛に逢ひ奉らん事決定たるべし。真佛とて外に向て尋ぬへからず。華嚴經に云三界唯一心。心外無別法心佛及衆生。是三無差別と。此心い牛馬畜類。鳥類虫蝼も。人の受たる心佛と一體なり。故に佛一切衆生。皆同佛性と説き給うなり。佛性と云も。真佛と云も。本來の面目と云も主人公と云も。一體にして異名なり。名い別なるに依て。心得の替るへきにあらず。彼の一心更に何に喩うへき方も無し。寒山云。吾心似秋月と頌も。箇樣に申せい。月の如く圓き物にて有るべきと思うへからず。長も短も無く。圓も方も無き物なり。形無くして。而も三千世界に充滿せり。火中に在ても火に燒けず。水中に在ても水に溺れず。汚穢不淨に在ても。更に垢ぬ。三界壞倒すとも全く敗れず壞せさる物なり。故に無門和尚。本來の面目を題する頌に云本來面目藏無處世界壞時渠不朽と頌し給うも此理なり。僧大慧禪師に問一人あり。悄しき處を嫌て。閑なる處を好み。身心を動かさず。善惡思量せず。默然と坐するを坐禪とす。此い是なりや否や。大慧禪師答云。此れ是

にあらも。默照の邪禪とて。深く先德の嫌う處なり。是又外道の同類なり。外道い無想定とて。善惡の思量に涉らも。默して動せも。念の起らさる處を是とも。是い空見無見に深く墜る者なり。又念の起さる處に。別に物有るへきと思うも有の見なり。有の見無の見とて何れも捨つへき見なり。さて有無に涉らさる處に一句あるべし。彼の一句と云い本來の主人公に相見もるを云なり。外道い彼主人公を知らもして。人い死して後。空にして無なりと計り心得て。有に非も無に非さる物をい。夢にも知らさるなり。以前の僧の問う如く怱しき處を嫌ひ。閑なる處を好まん時。彼の主人公い閑なる處ばかりに在て。怱しき處にい在るへからも候や。彼本來の面目い怱しき處にもあり。又閑なる處にも在る物なり。古人云有心を以て求むへからも。無心を以て求むへからも。言語を以て至るへからも。寂默を以て至るへからもと說き給うも此事なり。念を起さも。身心動せも。默然たる處。佛法にて候ハヽ。枯木石頭も佛法を得たる者哉や。箇樣の見解。捨つへき事あり。善

悪有無にも渉らさる處の一句を肯うを。大悟大徹の人と云なり。達磨大師に問う出家と申へ。如何様なる體を云や。答云。鬚髮を剃落して。衣を被たるべかりを。出家なるへしと思うべのらも。縱ひ髮を剃ま。衣袈裟を着したりとも。悟らされバ未た出家にあらも。在家の凡夫たるべし。又問。白衣へ妻子あり。婬欲除のも何に依ての成佛もる事を得てんや。答云。只見性を云。婬欲を云わも。只見性せさるの爲めなり。只見性もる事を得へ。婬欲空寂とゝて。自ら斷除も。又樂着もる事なのれ。

縱ひ習心あるも。誡めをあさも。所以云何となもへ。心性本より清淨にして赤肉の内に在り雖も。染汚もる事なく。心性本來清淨にして。飢たる事なく。渴もる事なく。寒熱なく病なく。恩愛なく眷屬なく。苦しくなく善惡なく。本來一物も無きなり。只色身ありと思うに依て。飢渴寒熱。色々の病あり。此色身本來空なりと心得へ。時々よ起る貪着心へ捨てらるへし。金剛經云。一切有為法。如夢幻泡影。如露亦如電。應作如是觀。と說き給うも此事ふま。以前申如く。善をも思へもも。悪をも思へぎ

る處。那箇の是本來の面目と。行住坐卧に心を着て看よ。忽然として彼面目に相逢う日あらん。縱ひ今生にて悟らを雖も。命終の時に臨て。惡業に引を。惡道に墮せぎして。來世出世して必一を聞て千を悟り。千を聞て萬を覺るへし。疑ひを生をる事なかれ。勉旃々々

○徹翁和尚の法語

今時の學道人。多くハ無心無念にして坐を凝を。大なる錯ヲなり未た聞このを。無情の道を解をと云事を。須く知るへし。心を以て心を傳へ。心を以て心を明むる事を。寒を覺へ熱を覺へ。飢を知り飽を知る處を。有念有心と思て。不覺不知の處。則無念無心なりと心得て。狀を向道の時節ありと思う。大なる錯ヲなり。寒熱を覺へ。飢飽を知る處。即無念無心の時節。真正向道の處あり。故に古人云即心即佛と。又云。平常心是道と。寒熱飢飽を知る底の。大念大心を越て看よ。終に念相も無く。終に心相も無し。本有自得自證して。廓落虛明なり。譬ハ一虹の蒼空に渡るが如し。行んと要をれハ即行き。坐せんと要をそハ便坐を。是を活祖の行

履休歇無事大安樂人の受用なり　大尾

應燈二祖の假名法語　大尾

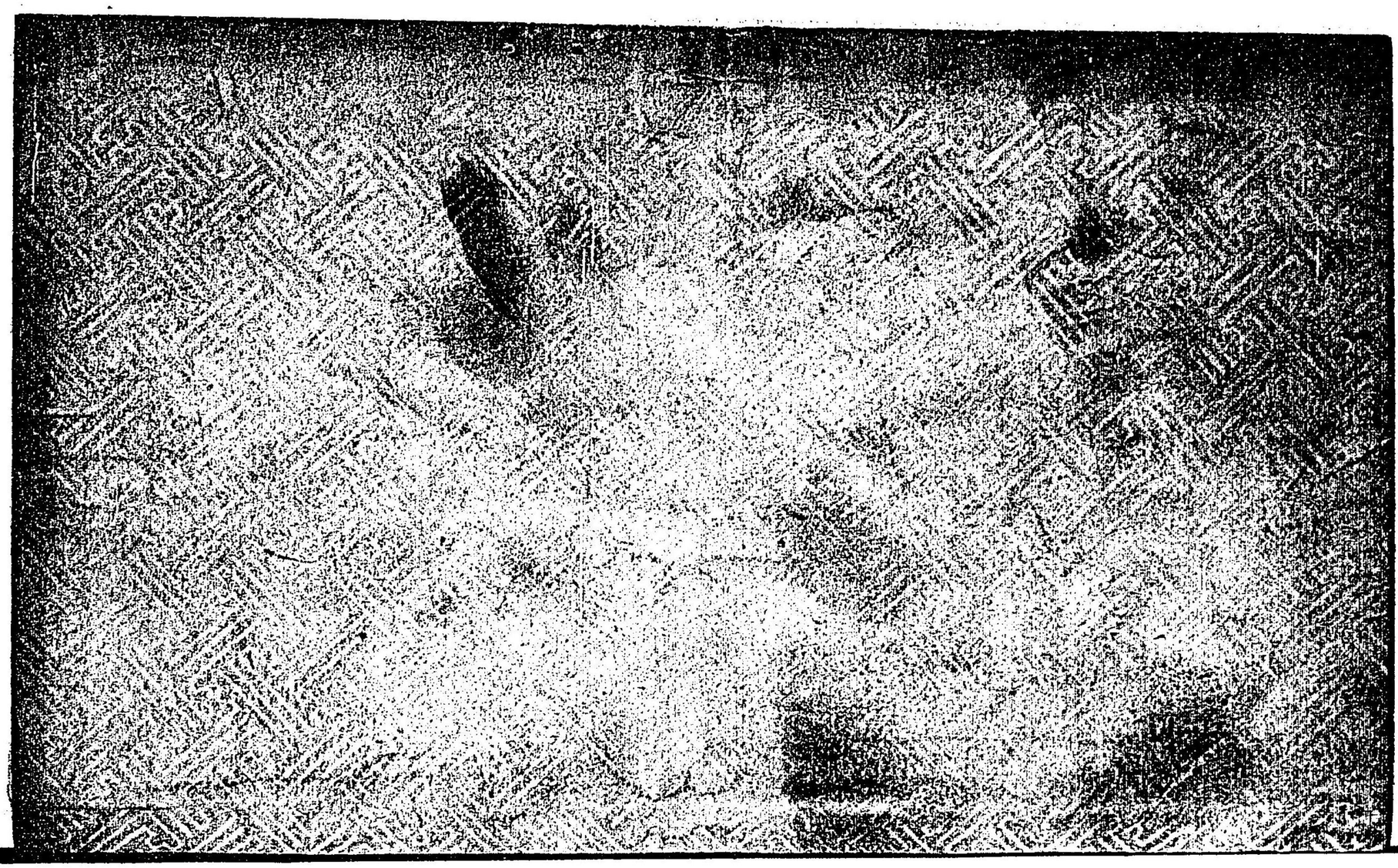
明治十九年三月廿四日出版御届
同　年四月十五日刻成發兌

大本山大德禪寺藏版

定價拾五錢

編輯人　東京府平民　水谷宗能
東京麻布區麻布本村町五十壹番地

出版人　京都府平民　河合卯之助
上京區第三十組寺町通二条下ル
妙満寺前町十番户



019368−000−6

特36−67

応燈二祖の仮名法語

水谷　宗能／編

M19. 4

ABG−0060

特36
67